

## 第4次佐倉市総合計画 総合計画審議会（第1回） 要録

日 時	平成 22 年 3 月 30 日（火） 15 時～17 時 00 分	場 所	佐倉市役所議会棟 第 4 委員会室
出 席 者	審議会委員：亀山委員、熊本委員、坂口委員、鈴木委員、田中委員、津留崎委員、西村委員、原委員、平川委員、松崎委員（五十音順）		
	蕨市長、鎌田副市長（挨拶、諮問書交付）		
	事務局	浪川企画政策部長 企画政策課 小島課長、櫻井副主幹、橋口副主幹、舎人主査補、榎主査補、呉屋主任主事	
内 容			
<p>(1)</p> <p><b>●市長挨拶</b></p> <p>本市の第3次総合計画は来年度で終了する予定となっているが、この10年間は、人口減少・少子高齢化の本格到来に代表されるように、社会構造が大きく変化した。この社会状況の中で、福祉、健康、教育、地域産業経済及び生活環境の充実など、次世代の佐倉市につながる施策を着実に実行していく必要がある。</p> <p>そのような意味で、新しい総合計画は、佐倉で長期的にあゆみを続けていくことのできる地域モデルをつくるべく一定の道筋を示すものであり、多くの市民参画のもと、全庁の英知を結集して策定作業に努める所存である。</p> <p>審議会委員の皆様の知識やご経験を、本審議会に頂戴いただけるようお願い申し上げます。</p> <p><b>●委員紹介（紹介順）</b></p> <p>亀山典子委員 … 株式会社日本総合研究所  鈴木 博委員 … 佐倉商工会議所会頭  原慶太郎委員 … 東京情報大学総合情報学部教授  平川 南委員 … 国立歴史民俗博物館館長  松崎泰子委員 … 日本社会事業大学常務理事  熊本秀雄委員 … 市民公募委員  坂口嘉一委員 … 市民公募委員  田中清治委員 … 市民公募委員  津留崎茂委員 … 市民公募委員  西村匡規委員 … 市民公募委員</p> <p><b>●事務局紹介</b></p> <p>企画政策部長・企画政策課担当者を紹介。</p> <p><b>●会長・副会長選出</b></p> <p>会長に鈴木博委員、副会長に坂口嘉一委員が互選される。</p> <p><b>●会議の公開に関する決定</b></p> <p>①会議は原則公開。ただし議事の内容によっては、会議の決定により非公開とすることができる。  ②会議録は、議事が多岐にわたることから、要録とする。</p>			

## (2) 委員自己紹介

(亀山委員)

日本総研の自治体行政関連業務に従事している。総合計画や行政評価等、日本の自治体ではなかなか推進されなかった政策課題について、計画策定・評価・分析によって次につながるように、行政側を手伝っている。佐倉市では、外部委員として施策評価（総合計画の施策レベルの進捗管理）を審議しており、佐倉市の総合計画全体を勉強し、施策の進捗度を見る機会にも恵まれた。これから総合計画を策定するにあたり、審議会の設定や分析データの準備に、行政側にも多大な労力がさかかっていると承知しているが、外部の目線から意見を述べていきたい。

(鈴木委員)

佐倉商工会議所で会頭を務める。佐倉商工会議所は、市内四千社のうち二千社が参加している。個人としても観光協会の花火イベントに長く携わり、現在は顧問となっている。また、国際交流基金の理事でもある。また、商工会議所のメンバーであり、長く佐倉で稼業を営んでいる。高齢者の住みよい街が商工会議所の目標であり、住みよいまちづくりを目指している。

(原委員)

東京情報大学総合情報学部勤務している。専門は生態学であり、自然環境の保全に情報技術をどのように活用していくかについて研究している。佐倉市では第3次総合計画の策定にも携わった。第3次総合計画が策定されてから、この10年は歴史の転換点である。2005年をピークに人口減少時代を迎えたが、その中で持続可能な社会をどのようにつくっていくかを市民視点で考えていきたい。名古屋で実施されたCOP10では、地球温暖化と生物多様性が同じ目線で論じられており、持続可能な社会には重要な視点だ。佐倉市は農林水産観光とたくさんの資源をもっており、自然からの恵みから影響を受ける点が多いと考える。

(平川委員)

国立歴史民俗博物館の館長を務める。歴博は、全時代を通して歴史と文化を展示する、国内唯一の博物館。今年、歴博の長年の宿題であった、現代の展示室がオープンした。現代史は、我々の精神面・物質面にとって重要な時代である。学会レベルの600点に及ぶ収蔵品が公開され、これからが出発点と考える。佐倉市にとって、歴博の役割は大きい。20年度に佐倉市が実施した市民意識調査において、市民が好きな場所・友人に紹介したい場所として54%の方に歴博を推薦していただいた。励みになるとともに、責任も認識している。歴史・自然・文化のもとで、地域としての佐倉と、歴博が協力し、提携していければと思う。

(熊本委員)

佐倉に来て20年余り経過した。退職後、身近な問題に興味を持っている。総合計画については、佐倉に人を呼び込むのが重要だと考える。昼間の人口増加。市民の安全。観光客が楽しめ、事業者が安全に働ける環境が大事だ。したがって、防犯・防災・交通事故防止が重要。特に防犯について、佐倉市は一日約2件犯罪が発生している。これまでも防犯対策をとられているが、今一度見直しして、突然の災害を排除されたい。道路については、歩道のほかに、その脇に自転車専用道路を併設することに関心を持っている。いずれにせよ、市民の一人として、広く総合計画を考えていきたい。

(坂口委員)

新聞社で広告に携わり、マスコミ関係の財団法人理事をしていた。日本が驚くべきスピードで発展する時代を見てきたが、「物で栄えて心で滅ぶ」との文句のとおり、自殺者や若者の非行、児童虐待など、心が荒廃したと感じている。大事なのは、コミュニティの連帯による相互扶助や、シチズンシップである。日本は市民革命を経ずして市民権を得たが、善良なる市民になってもらうために、まちづくりをどうしたらいいのかを考えたい。

佐倉市では、都市マスタープランでも並行して委員に就任している。13年度の第3次総合計画では人口21万人推計だったが、現在は17万6千人に減っている。これは、財政にも大きな影響がある。文化や歴史の資源をもっと磨くべきではと疑問を持っており、都市マスタープラン策定に参加している。

佐倉朝日健康マラソンは、4年前の参加者は5千人、今は1万人超。10年間で大きく進歩した。カラフルなチラシや、著名人のPRや呼びかけの宣伝効果等により、人を呼び寄せる大会になった。

それを佐倉の長期的なまちづくりに活用すればと考える。魅力あるまちづくりに向け、問題点をたくさん出していこうと思う。

(田中委員)

応募の際には、佐倉の風土、環境について作文を提出した。佐倉は、点と点をつなぐ線の整備が全く不十分だ。歩道がでこぼこで、道路標識もほとんどない。健常者も歩けないのに、点字ブロックも不十分で、障害者が容易に歩行できない。直通バスも非常に少なく、市外の方が観光しづらい。佐倉の魅力のアピールが欠けている。

市政に要求するものは、第3次総合計画にすべて盛り込まれている反面、絵に描いた餅とも言える。人口増加は見込めず、税収も伸びず、高齢化社会で福祉に予算をとられている。日本に一番欠けているのは、寄附文化と考える。例えばアメリカでは、公職に就く人は寄付を出すのが当たり前という感覚が発達しているが、日本は逆の傾向があるのでは。

また、佐倉は財政面から言えば、マイナス思考な面がある。公共依存をやめて、個人責任の問題もあるとの意識改革をしていかないと、福祉予算など出ていくばかり。第4次総合計画には、市民意識改革も加えたい。プラス思考にするには、企業誘致が重要だ。

(津留崎委員)

佐倉に住んで17年程度で、自然環境・歴史資産に富んだ佐倉を大変気に入っている。そのイメージを大事にするため、京成佐倉駅から歴博などのアクセスの確保や景観を維持していかないと考えて本審議会に参加した。

(西村委員)

退職前はサービス産業に従事したが、現在は佐倉市環境審議委員、指定管理者審査委員会委員、公募モニター等に就いた。

まちづくり懇談会に参加して、市内によっても地区によってニーズが違っていると実感した。昭和40年頃から開発した中志津は、現在は地域人口の40%超が高齢者である。さらに、市民意見調査を見ていると、将来の不安に対する意見が60%以上提出されている。今後10年間を計画するならば、十分考えなくてはならない課題だ。例えば、市内文化施設に付随したイベントを盛り上げていくなどの対応も必要だ。市内でも都市化した志津地区でもこの状況であり、地区ごとに差異があるため、シャッター通りなどの活性化を若い人の意見をまじえて検討していくことが必要だろう。

また、成田空港の発展から、佐倉への呼び込みを考えていきたい。市の文化施設は月曜休館が多いが、いつ訪れても何でも見られるように、休館日を減らすシステムづくりを目指してはどうか。

(松崎委員)

淑徳大学社会福祉学部に勤務し、社会福祉政策が専門である。日本社会事業大学常務理事。社会福祉協議会で地域ぐるみ活動を実施し、第1回介護保険事業計画の策定にも参画した。平成12年の社会福祉法の改正後、コミュニティの中で自分らしく生きていく、老若が共生できる、市民のための地域福祉の理念が重要視されるようになった。第3次佐倉市総合計画にも含まれているが、今後は、地域性による課題(点)と佐倉市全体(面)の課題のすりあわせと再構築が問題である。

### (3) 第4次佐倉市総合計画の策定状況について

#### 議 事

#### ●第3次佐倉市総合計画について概要説明

##### 【資料1 第3次佐倉市総合計画後期基本計画書】

(3頁) 総合計画の構成は三層構造。

基本構想：歴史自然文化のまちの理念付き。審議会の議決を要する。

基本計画：施策を体系的に位置づけたもの。中期計画。

実施計画：基本計画の施策を具体的に実現する事業。毎年度見直しする。

(6頁) 施策体系図。健康福祉、生活環境、文化学習、産業経済、都市基盤の5本の柱で構成されている。その上に、将来都市像がある。

(10頁) 第3次佐倉市総合計画は22年度を目標年度としている。後期基本計画の見直し時に目標

人口を減らし、17万6千人が目標人口である。  
(11 頁) キャッチコピー「歴史・自然・文化のまち佐倉」は市民公募による。土地利用は市街化区域が23%で、市街化調整区域が大変多い状況である。

#### 【資料2 第4次佐倉市総合計画について】

佐倉市は、今まで3度総合計画を策定した。第1次は昭和49～58年、「印旛地区の核」が将来都市像。第2次は昭和59～平成12年、「活力ある文化都市」が将来都市像。第3次は平成13年度から実施しており、現在の総合計画である。

#### (2 頁) 策定スケジュール

- 20年度：市民意識調査、基礎調査の実施。類似都市比較分析。将来人口フレーム。
- 21年度：まちづくり懇談会、市民意見募集、団体意見交換会。
- 22年度：総合計画策定本部、総合計画審議会。市民意見公募を経て、9月議会に上程予定。平成22年6月議会において、策定報告を実施する予定である。

#### 【資料3 佐倉市の新しいまちづくりに向けた提案】

- ・まちづくり懇談会の内容を集約した。
- ・佐倉市の課題
  - 公共交通、施設の整備、高齢者福祉施設やヘルパー不足、老後の不安、高齢者の活用、豊富な歴史文化資源の活用、観光客の受け入れ態勢（アクセス、飲食店が不便）、若者の就業環境、印旛沼の水質改善、NPOの横の連携等。
- ・新しいまちづくりに向けた提案
  - 佐倉市の強みを活かしたまちづくり、市の財政の活用、産業振興、観光資源の活用（印旛沼、歴博等）、農業・地場産業の育成、財源確保のために観光立市、市民サミットや市民参加のまちづくり、団塊世代のスキルの活用等。

#### 【資料4 団体アンケート】

市内44団体にアンケートを実施した。  
高齢者・障害者に住みよいまちづくりの提案や、佐倉市独自の施策が必要などの意見、駅前環境整備やイベントの充実等への希望もあった。

#### 【資料5 基礎調査報告書】

21年3月に報告したもの。11年度までは人口が増加したが、それ以降は横ばい傾向にある。地区別では、佐倉は3%減少、志津や根郷・千代田地区は増加傾向。開発等により、27年度までに人口増加があるかもしれない。

将来人口の推計については、佐倉市は18年度から減少傾向にある。自然減であったが、社会増により横ばいとなっている。現在の人口は17万6千人である、平成30年度に16万7千人となつて、減少幅は小さくなるのではないかと思われる。将来的には死亡率が高まるため、減少傾向はまぬがれない。年齢別構成比で見れば、人口は若干減少する中で、65歳以上人口はかなり増えてくる。

#### 【資料6 市民意識調査報告書】

平成20年度に実施したもの。回答率60.5%。回答者は70歳以上が多いため、それを反映した意見の偏りもあると考える。

内容としては、佐倉市の住みやすさは「どちらともいえない」が増加した。改善のスピードが遅れ、住環境が悪いという印象があるようだ。住みやすさとしては買い物の便がよくなったとする一方で、風紀が悪くなったとの意見が多い。

近所とはあいさつ程度のつきあいであり、地区の連帯感が減少した模様である。付き合い方を重視していかななくてはならない。

不安に感じるものとして挙げられたのは、老後、家族の健康、所得等。

老後の生活については、6割が仕事を持ちたいと回答している。シルバー世代の活躍の場の提供が課題と言える。

今後の市政強化への希望・期待については、高齢者医療・福祉の充実。地域の防犯活動の強化や歩道の整備、公共施設の整備等。

## 【質疑】

(委員)

高齢者問題が非常に多い。福祉対策を充実するほど、支出が増える。例えば、ある国では救急車は有料だが、日本は無料なため、救急車の出動が増える面もある。財政と収入のからみを検討すべきである。介護サービスについても、個人責任の部分も大きいのではないか。市民の意識改革についても、総合計画に含められないか検討されたい。

(委員)

市民が税金を納めて助けあうという点から考えると、財政と収入を割り切りすぎると、絆やムラ社会が切れてしまうこともある。隣近所ともつきあいが薄い現状では、人とのつながりを大事にする施策を作っていくのも行政の役目と言える。

(委員)

たしかに、お互いに助け合うという意識改革が希薄だ。オーストラリアは福祉国家として有名だが、実は障害者施設は特に充実しておらず、見知らぬ人同士でも助け合う意識が発達しているということ。お互いに助け合う意識の育成が、現在の日本でも重要である。

(委員)

コミュニティ、助け合いの意識は、商工会議所でも課題になっている。今後の課題としたい。

(委員)

昨年、市民大学で、保育園を見学、取材した。保育園の柵のところでお年寄り夫婦が外で見ていた。若夫婦にばれないように外から見ているのだという。親子関係から希薄になっているということだろう。また、離婚等、夫婦間の問題も念頭に置いて対策を考えていく必要がある。

(委員)

個別的な事情は多種多様だ。孫世代との交流は、家族観の変化とも関係している。自己責任以前に、佐倉市の子育て支援も保育園の役割、家族を支える役割を求められているといえる。地域で子育てをするような仕組みを考えていくべきだ。

(委員)

資料5の21頁「③2005年の将来像」に、佐倉市の立ち位置が記載されている。成田空港や千葉ニュータウンと共存することで盛り上がっていくものもある。例えば、「通勤できる城下町」というキャッチフレーズを用いるとか。歴史的な近隣市町村との関係から言っても、北総エリア全体でよくなっていくという観点も必要だ。

(委員)

佐倉市は行政区割りと商圈という点では、指折りの過当競争を行っている。その点で、観光行政などに道があるのではないかと思われる。

(委員)

今後の審議会の進め方を確認したい。「総合計画の策定方針の提案」とあるが、先々の審議会において実施するという理解で良いか。

(事務局)

事務局で作成した資料を審議会に順次提出し、総合計画の策定に向けて、こうしたほうが良いのではないかという意見を、委員のみなさまから提案していただく。